

「嚴子安和」に関する覚え書き

—『三体詩幻雲抄』など三体詩抄物を資料に—

劉

玲

0 問題提起

劉（2013）では、室町時代における漢籍流布の状況を把握しようとして、内閣文庫蔵天文五年（1536）写『三体詩幻雲抄』（以下『幻雲抄』と略す）を資料にし、抄文中に引用された漢籍に注目して調べた結果、266種の漢籍（計2060箇所）を確認できた。これは川瀬（1970）、嚴（1992）など数種もの先行研究において指摘されている漢籍の種類（計165種）を大幅に超えている。そのうち、中国国内において古くから散逸したとされる書物として、嚴子安の「次三体唐詩三体家法絶句之和」「唐登科記」「蔡寛夫詩話」「王直方詩話」「古今詩話」「陳輔之詩話」「玉林中興詩話」などを指摘した（劉2013〈49ページ〉）。特に、嚴子安の「次三体唐詩三体家法絶句之和」については、

実は、幻雲抄において、ほかにも「嚴子安次三体家法」（49-16）、「嚴子安次唐詩三体家法」（81-12）、「嚴子安次韻絶句」（88-23）とあるように、嚴子安が三体詩の絶句を対象にして「和韻詩」の書を作ったという記録を残している。それだけでなく、「和詩」は「子安和云」などの形で全文を引用しており、計163首確認できた。（劉2013〈48ページ〉）

と言及している。

嚴子安の「次三体唐詩三体家法絶句之和」（以下「嚴子安和」と略す）は、中国南宋成立の唐詩選本『唐三体詩』に収められている七言絶句に対して作られた和（韻）詩である。『幻雲抄』において、和詩の前に「嚴子安和云」や「子安和云」を冠して記録されている。例えば、次の（1）は、『唐三体詩』に収められている陸龜蒙「華陽巾」詩「運華峰下得佳名 雲褐相兼上鶴翎 須是古壇秋霽後 静焚香炷禮寒星」の和詩であり、（2）は錢起「帰鴈」詩「瀟湘何事等閑回 水碧沙明兩岸苔 二十五絃彈夜月 不勝清怨却飛来」の和詩である。

- （1）嚴子安和云 華陽仙子自裁名 月下吹笙載鳳翎 飛過若耶秋水上 飄々倒影帶流星（四四八6）^{（注1）}
- （2）子安和云 春風北去朔風回 飲啄江湖宿淺苔 南向戕荆繪弋密 衡山高處早飯来（一〇九8）

「嚴子安和」は、最近、中国文学研究の分野において注目されるようになっている。査（2012）では、『幻雲抄』と『曉風集（六冊本）』（資料について1節に詳述する）を資料に、嚴子安和を整理した上、中国文学史における「和唐詩」の歴史について探り、「这些和诗非名家名作，却是唐诗流传过程中一个重要现象，对于研究唐诗流传史与元明

詩学史具有特殊的意义与价值（同著37ぺ。これらの和詩は名作でないが、唐詩が後世に伝播する過程において重要な事象であり、唐詩流伝の歴史並びに元・明時代の詩学史に関する研究において特殊な意味をもち、価値あるものである。——筆者訳）」とあるように、嚴子安の和詩をはじめとする唐詩の和詩がもつ特殊な意味を指摘した。

小稿では、「嚴子安和」について、現在まで『幻雲抄』など三体詩抄物によって調査しわかったことについて報告しておきたい。便宜上、「嚴子安和」と記す場合に、書物そのものを指し、その書物に収められた和詩をいう場合には「 」をつけない。なお、小稿は、この書物の原貌を復元するための作業の一環としておく。

1 これまで見てきた三体詩抄物と嚴子安和が記録される状況

三体詩抄物は、『唐三体詩』を注釈の対象にして作られた抄物を指している^(注2)。『唐三体詩』は通称で、諸本には「唐詩三体家法」や「唐賢三体家法」などといった書名が見られる。中唐・晩唐の詩人167名の詩を収め、南宋1250年に成立した。原本は無注本であり、元の時に三系統の注本が作られた。この三系統の注本についてまとめると、表1のようになる。所収の詩数や詩型の配列順は本によって異なり、aとcの両系統では七言絶句・七言律詩・五言律詩の順で、b系統はそれを逆にしている。また、bとcの両系統では同じく494首、a系統では五言律詩がやや少なく、486首である(以上村上(1978〈12ぺ〜13ぺ〉)による)。この三系統の注本は、後に日本に伝わり^(注3)、五山僧の間で広く愛読されており、五山僧によって三体詩抄物が数多く作られた。ただし、それら三体詩抄物は、三系統のうち当時に最も広く流布していたc系統、つまりいわゆる増注本(「増注唐賢絶句三体詩法」などという)を注釈の対象にしたものである。

【表1】日本に流布する三系統の注本

系統・成立	所収詩数・詩型の配列
a 圓至天隱注本、二十巻、1305年	七言絶句 (174首)・七言律詩 (111首)・五言律詩 (201首)
b 斐季昌注本(天隱注本を少し含む)、三巻、1305年。抄物に「古本」という。	五言律詩 (209首)・七言律詩 (111首)・七言絶句 (174首)
c 増注本(天隱注に季昌注を抜粋して加えた)。抄物に「新本」という。	七言絶句 (174首)・七言律詩 (111首)・五言律詩 (209首)

三体詩抄物は具体的にどれほどあるか未だ明らかではない。「嚴子安和」の原貌を復元することを目標とする以上、三体詩抄物になるべく多く調査する必要があるが、現在まで、主として、坪井(1977〈639ぺ〜642ぺ〉)と谷澤(1977〈629ぺ〜641ぺ〉)において貴重と考えられているもの^(注4)から調査してきた。なるべく異なる抄者の抄、成立時期がやや異なる抄、室町時代の古写本だけでなく、文字の判別がしやすい江戸時代の古活字本も調査した。前記『幻雲抄』を含め、あわせて7種あり、表2にはば時代順

に掲げる。【 】中に、記載される厳子安和の数を記す（なお、一回のみの調査で、少々誤りがあることを断っておく）。

【表2】調査した抄物及び「厳子安和」の記録状況

- ㊦『暁風集（四冊本）』（小稿における呼び方）：万里集九（？-1468年頃）の抄。国会図書館蔵、四冊。ほとんど漢文の抄。四冊目から筆跡が著しく異なり、数人の手による書写か。【160首】
- ㊧『暁風集（六冊本）』（小稿における呼び方）：同上、万里集九の抄。国会図書館蔵、六冊。ほとんど漢文の抄。【116首】
- ㊨『聴松和尚三体詩之抄』：希世靈彦(1403-1488年)の抄。名古屋蓬左文庫蔵駿河御譲本、二冊、1469年成立。ほとんど仮名の抄。【1首】
- ㊩『東福寺湖月和尚三体詩抄』（以下『湖月抄』と略す）：湖月信鏡（？-1535年）の抄。名古屋蓬左文庫蔵駿河御譲本、三冊、1515年成立。ほとんど漢文の抄。湖月自らの説及び万里集九・蘭坡景直ら四人の所説を含む。【154首】
- ㊪『幻雲抄』：桃源瑞仙ら30余人の所説を幻雲（1460-1533年）が取り合わせた。中田祝夫編・抄物大系所収影印本『内閣文庫蔵天文五年写本三体詩幻雲抄』、五冊本、1532年伝写本。漢文の抄・仮名の抄両方をもつ。【163首】
- ㊫『三体詩素隠抄』：説心素隠の抄。国会図書館亀田文庫所蔵本、寛永十四年丁丑三月吉日識語記。中田祝夫編抄物大系所収古活字版。仮名の抄。【0首】
- ㊬『三体詩絶句抄』：三冊。刊記に「于時元和第六庚申仲夏吉旦 前南禅古潤叟」とある。抄物小系22所収（高羽五郎作成）。漢文の抄・仮名の抄両方をもつ。【2首】

㊦～㊪は室町時代の古写本で、㊫㊬は江戸時代の古活字本の類である。うち、㊫だけが『唐三体詩』全巻にわたって、つまり七言絶句・七言律詩・五言律詩の三詩型すべてを含め、抄が施されている。その他は七言絶句（174首）について抄をしているいわゆる「絶句抄」であり、また、うち㊬は七言絶句すべてでなく、呉融「秋色」まで（119首）についてのみ抄をしている。

幸い、これら抄物のうち、表2中【 】に示す通り、㊫以外において多少とも「厳子安和」が記録されており、『幻雲抄』163首、『暁風集（四冊本）』160首、『湖月抄』154首、『暁風集（六冊本）』116首とあるように、この四抄物において多く見られている。その他において一、二首しか見られない。また、興味深いことに、室町時代の古写本においては㊫以外のすべてに多く見られるのに対して、江戸時代の古活字本においては一貫して僅少である。これは何を意味するのだろうか、疑問が残る。

一方、次の（3）によれば、厳子安和は本来163首作られていたことが知られる。この記録は『暁風集（四冊本）』のほぼ巻末近く、「君山」詩の抄が終了したところに見える。

（3）厳子安無和 凡厳子安和詩一百六十三篇也 三体絶句一百七十四首 作者一百六十七人 此内积者八人（『暁風集（四冊本）』第四冊）

厳子安和は、『暁風集（四冊本）』に160首記録しているが、「君山」詩の直前の「歩虚詞」和が最後で、それ以降厳子安和が見られない。（3）に見る通り、「厳子安無和」

とあるように「君山」詩について厳子安和がないと述べた上、厳子安和の総数「一百六十三篇」を記して締めくくっている。このような記録は以上の抄物中に『暁風集（四冊本）』にしか見られないが、これを信用すれば、つまり、『幻雲抄』は厳子安和163首を漏れずに記録したとわかる。

2 厳子安和は各抄物においてどのように記録されているのか

以下、小稿では、主として厳子安和を多く記録した『幻雲抄』・『暁風集（四冊本）』・『暁風集（六冊本）』・『湖月抄』の四抄物を調査資料に進めていきたい。

各抄物の体裁はややまちまちであり、厳子安和が記録される位置も一様ではない。そもそも抄の対象である増注本には、絶句の詩題、作者、本文及び天隠注、裴庾注の五項目の内容が含まれている。『幻雲抄』では、これらを増注本の体裁通りに抄文の前にまとめて写している。その他の抄物では、これとは異なり、たいてい詩題・作者・本文の三項目をそれぞれ一まとまりとして取り上げ、抄が施されている。

厳子安和の抄文中における位置についてみると、『幻雲抄』と『湖月抄』においては共通しており、多くの場合、当該絶句について解釈説明した抄がほぼすべて終わった後に行を改めて置かれており、少数は抄中に置かれることがある。二種の『暁風集』においてはやや整然としておらず、『幻雲抄』と『湖月抄』と同様に抄がほぼすべて終わった後か抄文中に置かれる以外に、詩題に関する抄の後に置かれることもあれば、絶句本文の直後に置かれることもある。具体的に、厳子安和の記録様式として、大きくA、B、Cの三つのパターンに分けられる。

Aは、和詩の前に「厳子安和云」や「厳子安和」^(注5)が記されている場合である。次の例や、前掲(1)(2)もこのパターンである。

- (4) 厳子安和云 処々深紅間映浅紅 柳揺新緑鳥啼風 昼楼十二輕烟外 人在繁華罨画中（『湖月抄』上／「江南春」和）
- (5) 厳子安和云 野花狼藉草連空 流水涓々達故宮 輦路榛蕪樵牧過 滿山落日鳥呼風（『暁風集（六冊本）』第四冊／「綺岫宮」和）
- (6) 蘭云 厳子安和之 夜泊楓橋五夜天 潮平風静未成眠 一声漁笛汀烟散 水滿星河月滿船（一三四12／「楓橋夜泊」和）

わずかながら、次のように、詩題（「患眼」）を併記することもある。

- (7) 厳子安患眼詩和云耳冷心焦氣血凝 眇昏目暗黑花生 不知誰是雲中手 豁我双瞳見日明（『暁風集（四冊本）』第二冊／「患眼」和）

『湖月抄』・『暁風集（四冊本）』・『暁風集（六冊本）』に記録される厳子安和は、すべて上のAの場合である。『幻雲抄』においては、Aの場合に20首見られるほか、以下のBとCの場合にそれぞれ99首と44首見られる。

Bは、和詩の前に「和云」・「和曰」・「和韻」などがあり、和詩の後に小文字書きで「厳子安」・「子安」・「子安句」・「子安和」・「子安和韻」・「子韻」などが記されている場合である。例えば、次の例である。

(8) 雪云 和曰 上陽宮廢黍離々 千古成墟事若疑 惆悵黃昏人靜後 數聲鳥鵲噪寒枝 嚴子安 (二一・二17 / 「上陽宮」和)

(9) 和云 江村雨過樹飛花 処々新烟日又斜 人在他鄉思故隴 那堪閑傍野人家 子安 魯考之 (二一・〇3 / 「寒食」和)

Cは、A・Bと異なり、和詩の前に「和云」や「和三体云」とあるのみで、嚴子安の名は記されていないという場合である。それらは前述したAの場合として、すべて『湖月抄』と『暁風集(四冊本)』に見られたため(『暁風集(六冊本)』に一部見られる)、嚴子安和と判断した。一々示さないが、例えば、前掲(5)「綺岫宮」和について、『幻雲抄』(二・三八14)では和詩の前に「和云」とあるのみ、嚴子安の名は見当たらない。また、同じように、次に示す「吳姫」和について、『幻雲抄』では「和三体云」とあり、嚴子安の名が記されていないが、『暁風集(四冊本)』(第一冊)、『暁風集(六冊本)』(第二冊)と『湖月抄』(上)において、いずれも和詩の前に「嚴子安和云」と記されている。

(10) 和三体云 國色傾城玷玉名 遠山眉黛淡粧明 清歌一曲晴雲駐 舞袖風回百媚生 雪本 (一〇・五21 / 「吳姫」和)

以上、大まかながら、嚴子安和の置かれる位置は抄物によって様々だが、その抄物内部においては一定していること、また、ほとんど「嚴子安和云」や「嚴子安和」を冠して決まった記録様式をとっていることの二点が明らかになった。これで、膨大な三体詩抄物から嚴子安和を探し出す目安もできたと考えられる。

3 「嚴子安和」はいったいどのような書物なのか

嚴子安和は163首あるということが明らかにしてきたが、「嚴子安和」はどのようなものか。すでに冒頭において述べたように、この書物は中国国内において古くから散逸したようである。今回、劉(2013)において調査した四庫類(参考文献「四庫類」)、明の時代の書物を網羅したとされる『千頃堂書目』、『五山版の研究』及び明とそれ以前の漢籍目録『日藏漢籍善本書録』に加えて、さらに、『明詩綜』『明詩紀事』及び近頃出された『全明詩』など明詩の総集類、『全明詩話』や明の人物伝記資料『列朝詩集小傳』『明人傳記資料索引』を調査してみたが、「嚴子安和」、または、それらしい書物や嚴子安本人に関する情報は、いっさい見当たらず、「嚴子安和」が、当時または後世に流布した痕跡すら残っていないようである。

一方、『幻雲抄』をはじめ、各抄物に残っている関連の記録によって、「嚴子安和」についていくつか情報を得た。以下に述べていきたい。

①「嚴子安和」の作者は明の人である

これについて、次の(11)～(13)の線部に「大明朝」と明確に記しているため、このように判断して問題ないだろう(注6)。

(11) 三體 七言絶句一体 七言八句一体 五言八句一体也 大明朝有嚴子安和三昧詩 往々寫本 又有張楷和三昧詩 悉不和 是亦往々寫本 亦有續三体詩

吳彦真張仲舉等諸人詩也（『曉風集（四冊本）』第一冊／『曉風集（六冊本）』第二冊。
冒頭部「三體」についての抄文）

- (12) 三體 七言絶句一体 七言八句一体 五言八句一体 續三體詩序義 餘ノ義詳
見于第二之序 大明朝有嚴子安和三體詩 又有張楷和三體詩^(註7) 悉不和 兩本
往々寫本（『湖月抄』上。同上）

- (13) 梅翁云（略）大明朝嚴子安和三體詩華清宮云 川前駐馬解郵程 曉浴溫泉暖更
清 十八樓臺無所處 白楊風起作秋声（『湖月抄』上／「華清宮」抄文）

②「嚴子安和」は数種の書写本が存在していた

以上 (11) (12) の _____ 線部に「往々寫本」とあるところについて、「和三體詩」は
度を重ねて書写され、いくつもの写本が伝わっていたという意に読み取れようか^(註8)。
後4節に述べるように、各抄物に記録されている和詩の本文において異文が少ないとい
うことが、同じく数種の写本が存することを物語っているように考えられる。また、次
の記録によれば、その写本のことを「嚴子安和草案」と呼ぶこともあったようである。

- (14) 嚴子安和草案 無此篇也^(註9)（『曉風集（四冊本）』第一冊／『曉風集（六冊本）』第二冊。
曹松「己亥歲」抄文の末尾）。

③「嚴子安和」は数種もの呼び名を持っていた

これについて、(11)～(13)に見る「和三體詩」以外に、次の(15)～(17)及び後掲(18)
(19) の _____ 線部のように、それぞれ「次韻絶句」・「次三體唐詩三體家法絶句」・「次三
體家法」・「次唐詩三體家法」と様々に呼ばれていた。これは写本による呼び名ではなか
らうか。

- (15) 嚴子安次韻絶句外題云 次唐詩三體家法卷之三（八八23）

- (16) 嚴子安次三體唐詩三體家法絶句之和 後跋序云 自早春遊望至步虚詞 首尾
四百三十餘首 徑自永樂乙未春正上旬迨及丁酉夏六月望日始集成帙 云々（五
九九20）

- (17) 嚴子安次三體家法序 乃豫章張顥所作也 顥序云 詩之音律 自三百篇後 至
唐寢盛 後世学詩者 多以唐為法（四九16）

④「嚴子安和」は明の永樂年間に成立した

これについて、前掲(16)しか見当たらないが、_____ 線部に示す「永樂^(註10) 乙未春
正」（1415年）から「丁酉夏六月」（1417年）にかけて「始集成帙」とあるのは、「嚴子
安次三體唐詩三體家法絶句之和」が成った時期を言っていると見られる。

⑤「嚴子安和」は『唐三體詩』裴季昌注本系統を用いている

前掲(16)「自早春遊望至步虚詞」とあるのは、「嚴子安次三體唐詩三體家法絶句之和」
の「後跋」において和詩を作った際に用いた『唐三體詩』のテキストについて説明して
いると見える。「早春遊望」は五言律詩の一番目にあり、「步虚詞」は七言絶句のほぼ最
後にあるため、和詩を作った際に用いたのは三系統ある『唐三體詩』のテキストのうち
のb系統、すなわち裴季昌注本であると判断できよう。なぜならば、前掲表1に示す通
り、この系統だけが五言律詩・七言律詩・七言絶句という配列になっているからであ

る。

⑥「嚴子安和」成立後に張顥と李泰による「序（叙）」が相次いで作られていた

これについて、前掲（17）と次の（18）線部によればわかるように、「豫章張顥」と「河南李泰」の二人がそれぞれ「次三体家法序（叙）」^(註11)を作った。また、（19）の線部によれば、張顥叙は「永樂十六年」（1418）に作られたことがわかる。李泰序の作成年は「永樂十一年歲次癸卯」（1413）とあるが、明らかに誤記である。前掲（16）に見る「丁酉夏六月」（1417）の成立年が正しいのであれば、「嚴子安和」がまだ未成立の永樂十一年（1413）において「叙」や「序」を作るはずがなく、しかも、ここに「永樂十六年」を先に、「永樂十一年」を後にという記録の仕方は文章の流れとしても自然でないからである。実は、永樂年間の「癸卯」年はただ一回のみ、つまり永樂二十一年（1423）にあたるのであり、書写者が不注意のため、「二十一年」と書かれたところを「二」を脱落して「十一年」と誤写してしまったのだろうか、「廿一」と書かれたところを「十一」と誤読してしまっただろうと考える。

（18）幻按（中略）新本天隱為正 季昌為副也 又河南李泰着嚴子安次唐詩三体家法叙云 汝陽周伯弼妙選編次 高安釈天隱更加集注 東嘉裴季昌後為增註 經三大手其編次始備 后必也無惑焉 然則子安用新本乎（八-12）

（19）私云 次唐詩三体家法叙者 豫章張顥叔永樂十六年三月三日書也 此外有李泰所書之序 永樂十一年歲次癸卯 冬十月上澣丁丑抄（八三11）

⑦「嚴子安和」成立後に和詩の注が付けられていた

次の（20）（21）の線部の「嚴子安和詩注」や「李泰倣通集注」について、関連する記録はほかにないが、「嚴子安和」に付けられた注のようである。（21）～（23）の線部の「注云」や「注」（ほかに二、三箇所）は、おそらく抄者が「嚴子安和詩注」や「李泰倣通集注」から引いたものであろう。また、その注の内容についてみると、（21）～（23）に示すように、和詩の中の用語や事項について解釈するものもあり、（24）に示すように、「和ノ題」について解釈するものもある。

（20）天隱注載季昌注云 嘉陵 属四州鳳州 季昌注云 属西川鳳州（中略）予按嚴子安和詩注云 属四川鳳州路（『湖月抄』中ノ「宿嘉陵驛」抄文）

（21）和云 叔夏初彈悟晉皇 胡笳謾自泣賢王 鶯吟燕語声悽切 白髮騷人淚兩行 注云 箏声如鶯吟燕語也 注 賜進士河東李泰倣通集注（一八八10ノ「贈彈箏人」和）

（22）和云 拂袖長歌傲管蕭 西風蘭棹已辞朝 怪來昨日帰心急 恰是蓴鱸秋正饒 注云 管蕭 管仲蕭何也（一七四14ノ「送隱者」和）

（23）嚴子安和云 華陽仙子自裁名 月下吹笙載鳳翎 飛過若耶秋水 上 飄々倒影帶流星 注 真仙傳云 韋節京兆人 家藏書万卷 魏武帝時為東宮侍讀 後卜居華山 号華陽子 名其巾曰華陽巾（四四八6ノ「華陽巾」和）

（24）此ノ和ノ題注如季昌注 墓之在所 拳遂州晋州之兩義（『湖月抄』中ノ「經賈嶋墓」抄文）

以上をまとめると、「嚴子安和」は『唐三体詩』裴季昌注本系統を対象にした明代（1417

年)に成った七言絶句の和であり、後に「次韻絶句」や「次三体唐詩三体家法絶句」などいくつか写本が伝わり、また、張・李の二人による「序(叙)」が付けられた。さらに、「厳子安和」もしくはその一部の和詩について注釈が施されており、「厳子安和」のテキストとして無注原本及び「厳子安和詩注」や「李泰倣通集注」と呼ばれる注本の両系統が流布していた可能性がある。

4 「厳子安和」は五山僧の間でどのように読まれていたのか

本土の中国においては、3節の冒頭に述べたように、「厳子安和」が当時または後世に流布した痕跡すら残っていないようだが、それは、当時の中国文壇において厳子安はそれほど活躍していなかったため、あるいは、「厳子安和」はそれほど評価されていなかったためであるかもしれない。しかし、後に、「厳子安和」は日本に伝わった。いつ・どのようにといった詳しい事情はまだ明らかではないが、禅宗僧侶をはじめとする入明僧の行き来が盛んだった時期^(注12)にあたって、「厳子安和」は『唐三体詩』と同様、五山僧によって日本に持ち込まれた可能性が考えられる。

『唐三体詩』が五山僧の間で愛読されるようにしたがって、それに対して作られた和詩の類、すなわち「厳子安和」(ほかに注7に紹介する「張楷和三鉢詩」)が注目されるようになり、次第に読まれるようになったと考えられる。また一方では、『幻雲抄』をはじめ三体詩抄物において「厳子安和」を1首も漏らさずにすべて記録したり、またはその一部を記録した(前掲表2)ということは、決して抄者たちが漠然と無意味に厳子安和を集めたただけだということに思えない。以下のような記録(____線部)が注目される。

(25) 九淵 捫厳子安和三体詩之華清和韻詩 川前駐馬解郵程 曉浴溫泉暖更清 云々
川者蜀之三川之川也 是故海棠ハ 蜀ノ花ナレハ 曰川紅 無悟克勤禪師
蜀人ナレハ 曰川勤 由是觀之 江南ト云詩ノ和韻ニ 川前トアルトキハ 此
江南指蜀江明矣 幻謂 以子安詩推之 則杜常行尽蜀江而入華清也 雖然川
中與華清相去甚遠矣 語勢不合也 子安詩所謂川前者 言川原之類乎(九三8/
「華清宮」抄文)

(26) 僧房——逢著二字 不期而逢也 与邂逅同也 村云 第一句ノ ツクリヤウ
狷狂也 フリシモ 欸冬花ノ サイテアル時ニ 逢賈島也 九淵 欸冬花在嚴
冬霜雪中 凌寒開花 譬之島処衰俗中而有君子節也 旧聞其說未信之 今按嚴
子安和此詩云 寒梅孤放雪中花 盖比賈島於寒梅也 於是始信旧講(——17/
「逢賈島」抄文)

(27) 梅云 覽勝作春社 春字誤歟 已是 稻粱肥 則作秋社可也 予以子安和觀之
自一句至四句似賦春社 不知為秋社乎 為春社乎(『湖月抄』中/「社日」抄文)

(25)では、巻頭の杜常の詩「華清宮」の一句目「行盡江南数十程 曉風殘月入華清」について抄している部分で、キーワードとなる「江南」が何処を指すかについて、「九淵」(九淵竜蹊)と「幻(謂)」(幻雲)の説を記している。九淵は、「厳子安和三体詩之華清和韻詩」にある「川前駐馬解郵程」句をヒントに、その「川」が「蜀之三川之川」で

あることから、「此江南指蜀江明矣」と解釈した。また、幻雲は、「以子安詩推之」とあるように、おそらく九淵の説を踏襲して、「杜常行尽蜀江而入華清也」として、同じく「江南」を「蜀江」と解釈した。(26)では、張籍の詩「逢賈島」の一句目「僧房逢著欵冬花」について抄している部分で、かつて「九淵」の説(____線部)について、幻雲は「旧聞其説未信之」だったが、「今按嚴子安和此詩」つまり嚴子安和にある「寒梅孤放雪中花」句によって九淵の説が正しいと考え、「於是始信旧講」となったわけである。そして、(27)では、張演の詩「社日」の詩題「社日」が「春社」と「秋社」のどちらを指すかについて抄している部分で、「梅(云)」「万里集九」の説では「作秋社可也」と解釈したが、「予」(湖月信鏡)は、「予以子安和觀之 自一句至四句似賦春社」とあるように、嚴子安和(社糕春酒割膳肥 柳嫩花繁映竹扉 日轉西窓簾幙静 一双燕子恰纔飯)が一句目から四句目まで春社を詠っていることを根拠に出している。

このように、九淵、幻雲、湖月は『唐三体詩』の解釈に際して、「嚴子安和」を用いたことが明らかである。そして、「嚴子安和」だけでなく、「嚴子安和詩注」(3節⑦)までも、「予」(湖月)が三体詩の解釈に用いたことが、次の記録によって知られる。ここは、雍陶の詩「宿嘉陵驛」の詩題にある「嘉陵」が何処かについて抄している部分で、「予」(湖月)は「嚴子安和詩注」によって「属四川風州路」であると解釈した。

(28) 天隱注載季昌注云 嘉陵 属四州鳳州 季昌注云 属西川鳳州(中略) 予以子安和詩注云 属四川風州路(前掲(20)再掲。『湖月抄』中)

これだけではない。次の____線部に見るように、「梅(謂)」「万里」が嚴子安和が林子中(注13)の詩「吳興」をまねて作ったかと評価したりすることもあった。

(29) 嚴子安和云 水辺楊柳岸辺沙 傑閣層樓幾万家 画舸往来桃葉渡 遊人笑語隔荷花 梅謂 嚴子安詩頗自林子中 機軸之中而出歟 林子中吳興云 遶郭芙渠拍岸平 花深蕩槳不聞声 万家笑語荷花裡 知是人間極樂城(『曉風集(四冊本)』第四冊/杜牧「秦淮」抄文。『湖月抄』(下)にほぼ同文)

以上のように、わずかながら、当時五山僧の間において、「嚴子安和」は間違いなく『唐三体詩』の解釈に用いられていたこと、また、時には評価の対象にされたりしていたことが窺えよう。特に、『唐三体詩』解釈の際に「嚴子安和」を用いるということは、つまり唐詩の和を用いて当該唐詩を読み解くということを意味するものであり、唐詩の和を用いることが唐詩解釈の手法の一つとして当時五山僧の間で行われていたと考えられる。本土の中国において不遇だった「嚴子安和」は、室町時代の五山僧の間で一時重宝され、ある程度流布していたようである。

なお、日本において、「嚴子安和」が注目されなくなり、次第に散逸してしまうようになったのはおそらく江戸時代に入ってからだろうと考える。それは、江戸時代の三体詩抄物において「嚴子安和」がごくわずかしき記録されていない(1節を参照)ことから看取されようが、この時期の三体詩抄物の作り方が室町時代と異なるようになったことがその一因として考えられる。

5 各抄物に記録される「巖子安和」においてどのような異同が見られるのか

「巖子安和」は『幻雲抄』に163首、『暁風集（四冊本）』に160首、『湖月抄』に154首、『暁風集（六冊本）』に116首あると前に述べたが、和詩の本文においてそれぞれどのような異同が見られるだろうか。小稿では、後掲表3に示すように、「巖子安和」の四分の一（40首）について調査し比較してみた。

表3では、『幻雲抄』に現れる順によって、1. 2. …のように和詩に番号をつけた。また、和詩本文は『幻雲抄』の記録によって示し、その他の三抄物において『幻雲抄』と異文であると判断できる箇所があれば、その箇所に____線を引いた上で、その後の[]中には『湖月抄』、[]中には『暁風集（四冊本）』、{ }中には『暁風集（六冊本）』における該当箇所をそれぞれ記入した。例えば、表3-9. 一句目に「山穴[[空]]」碧水流」としたのは、『幻雲抄』では「穴」で、『湖月抄』と『暁風集（四冊本）』では「空」であるという場合である。『暁風集（六冊本）』では『幻雲抄』に同文であるというような場合は、特に記さなかった。当該和詩は見当たらない場合、末尾に記した。例えば、表3-10.について、『暁風集（六冊本）』では記録されていないので、{ }中に「存しない」と記入した^(注14)。

【表3】「巖子安和」本文一覧（1.～40.）

1. 杜常『華清宮』川前駐馬解郵程 暁浴温泉暖更清 十八樓臺無所處 白楊風起作秋声（九六15/九一23/九四18、後の二箇所では一句目と二句目のみ）
2. 薛能『吳姬』國色傾城玷玉名 遠山眉黛淡粧明 清歌一曲晴雲駐 舞袖風回百媚生（一〇五21）
3. 錢起『帰廬』春風北去朔風回 飲啄江湖宿淺^{〔残〕} 苔 南向戕荆繪弋密 衡山高處早飯來（一〇九8）
4. 張籍『逢賈島』寒梅孤放雪中花 素質清香映月斜 不与群芳争艷麗 一枝閑傍野人家（一一三7）
5. 杜牧『江南春』処々深紅間^{[[〔映〕]]} 淺紅 柳搖新綠鳥呼^{[[〔啼〕]]} 風 屋樓十二輕烟外 人在繁華罨畫中（一一七16）
6. 王昌齡『別李浦之京』相逢相別各東西 喜極悲生意兩迷 塞北江南天地闊 雁行飯後鷓鴣啼（一二九17）
7. 王維『題崔處士林亭』松筠為侶^{[[〔呂〕]]} 石為隣 水繞幽亭地絕塵 好鳥一声春夢醒 朗吟天地一閑人（一三二17）
8. 張繼『楓橋夜泊』夜泊楓橋五夜天 潮平風静未成眠 一声漁笛汀烟散 水滿星河月滿船（一三四12/一三六17）
9. 戴叔倫『贈殷亮』霜落山穴^{[[〔空〕]]} 碧水流 青々松柏晚含秋 古今亦有南樓月 近覺無人到上頭^{〔近覺無〕}（一四〇17）
10. 『湘南即事』澤國天寒蒲柳衰 五湖処々着漁師 孤舟此日東飯去 正及蓴鱸秋美時（一四四10）{存しない}
11. 韓翃『送齊山人』栖山遁世鹿皮公 歸去憑虛駕曉風 東入崑崙山下過 海風孤鶴月明中（一四六22）
12. 劉商『送元史君自楚移越』千里褰帷振異邪 春風東入越人家 金符旌節維揚道 要看西湖十里花（一四九18）
13. 李涉『竹枝詞』瀟湘南望翠雲低 日落君山鳥夜啼 万里江湖名利客 愁随烟浪過蠻溪（一五二24）
14. 竇常『香山館聽子規』啼得江南花漸稀 傷春行客每沾衣 不堪更臥西面^{[[〔窓〕]]} 月 欹枕一声魂^{〔魄〕} 夢飛（一五五18）
15. 徐凝『長慶春』雨潤風和柳帶烟 晴樓簫鼓慶^{〔賀〕} 新年 日斜好鳥花間語^{〔話〕} 喚得遊人醉欲眠（一五七5）
16. 雍陶『城西訪友人別墅』閑出城西日未斜 因循遠訪隱君家 溪橋流水青山外 繞屋桑麻幾樹花（一六八20）
17. 杜牧『貴池縣亭子』柳暗花濃厭楚臺 九華雲散画图開 江声月色無窮意 盡入詩人眼

底来（一七一11） 18. 許渾『送隱者』拂袖長歌傲管蕭 西風蘭棹已辭朝 怪來昨日歸心急 恰是
 蓴鱸秋正饒（一七四14） 19. 『送宋處士歸山』紅塵久住〔信〕念飯遲 背負焦〔隻〕桐跨竹枝 一
 到故山猿鶴喜 松陰石上了殘碁（一七八10） 20. 『秋思』幾行寒厂暮天秋 憶昔蘇仙赤壁遊 万里
 月明孤鶴淚〔〔悵〕〕 水浮牛斗邊船頭（一八〇21）〔存しない〕 21. 李遠『黃陵廟』古廟江濤秋復
 春 班々綠竹粉痕新 花間野鳥聲鳴咽 疑是當初泣泪人（一八四9） 22. 溫庭筠『贈彈箏人』叔
 夏初憚憚晉皇 胡笳謾自泣賢王 鶯吟燕語聲悽切 白髮騷人淚兩行（一八八10） 23. 唐彥謙『韋曲』
 処々桑榆櫟櫟才 天寒一例葉凋摧 春光幾日無尋処 喜見深林一樹梅（一九一19） 24. 『曲江春望』
 淡煙遠水接殘霞 草木青々自歲華 廢苑荒陵人到少 隔林猶見鹿銜花（一九五10） 25. 陸龜蒙『鄴
 宮』古城殘礎埋荊棘 苑樹宮花依旧春 草銅臺〔〔〔草暗銅臺〕〕〕 歌舞尽 寒鳥啼後客沾巾（一九七
 22） 26. 吳融『閬鄉卜居』昔年捧檄向慈幃 今日低摧白首皈 重葺茅簷築旧菊 角巾底下綠荷衣（二
 〇一8） 27. 韓偓『尤溪道中』油笠肩輿石徑斜 一声杜宇数声鴉 隔林雨過行人語〔話〕 滿路香
 風茉莉花（二〇三23） 28. 嚴維『丹陽送遠參軍』離亭綠柳繫孤舟 江水江花送客秋〔〔〔愁〕〕〕 一
 片雲帆千里去 夕陽旗影逐〔逐〕 颺悠（二〇五13） 29. 韓翃『寒食』江村雨過樹飛花 処々新烟
 日又斜 人在他鄉思故隴 那堪閑傍野人家（二一〇3） 30. 竇庠『上陽宮』上陽宮廢黍離々 千
 古成墟事若疑 惆悵黄昏人静後 数声鳥鵲噪寒枝（二一二17） 31. 鮑溶『贈楊鍊師』幾度乘驄駕
 海雲 星冠霞帔鶴爲紋 此行應向蓬萊去 何處尋幌〔春〕〔聲〕得訪君（二一五19） 32. 雍陶『和
 孫明府懷舊山』自覺前非棄此山 素持廉讓有無間 三年歷遍梁蒙路 錯認愛鳥居鳥似白鷗（二一八
 9） 33. 『贈日東鑒禪僧』來日乘杯泛渤潮 雲間飛錫到鳴條 禪心随处無痕跡 月滿秋空照流寥（二
 二一22） 34. 杜荀鶴『旅懷』一曲南音宿雨收 歸鴻〔〔雁〕〕 落葉滿山愁 故人千里無書到 近日
 相思捻白頭（二二二13） 35. 劉長卿『寄別朱拾遺』春風強直滄洲客 天府論才得異能 一自排雲
 称獻納 應無閑夢到江陵（二二五19） 36. 秦系『題張道士山居』五色雲城仙子家 巢雲松下落金
 花 石壇雨過灵芝老 夜半東窓見曉霞（二二八13） 37. 張籍『寄李渤』春滿雲林綠間紅 岳祠風
 迴遠聞鐘 近來知有謝公履〔〔〔履〕〕〕 應上鷄鳴絕頂峰（二三〇17） 38. 李群玉『南莊春晚』簫笠
 歸來急繫舟 得魚載酒向林丘 落花滿眼随流水 蝶与遊蜂相對愁（二三三5） 39. 唐彥謙『長溪
 秋思』試把長釣放〔故〕 碧流 水寒魚去挂〔〔〔挂〕〕〕 竿頭 黃芦敗蓼風蕭瑟 鷗鷺無聲也自愁（二
 三五6） 40. 鮑溶『隋宮』野花芳草石梁斜〔〔〔野花芳草石梁斜〕〕〕 潮落長堤鳥篆沙〔〔〔潮落長堤鳥篆沙〕〕〕
 惆悵旧時鶯与燕 領將春色入誰家（二三七1）

上記の表3により、嚴子安和の本文における異同がいくつか観察された。

まず、四抄物において、みな共通した本文をもち、異文が見られないという場合が多く、1. 2. 4. 6. 8. 10. 11. 12. 13. 16. 17. 18. 21. 22. 23. 24. 26. 29. 30. 32. 33. 35. 36. 38. の24首ある。これは、つまり四抄物を通して本文が一通りしか存在しないという場合である。例えば、表3-1.「華清宮」和について、四抄物においてみな「川前駐馬解郵程 曉浴温泉暖更清 十八樓臺無所處 白楊風起作秋声」とある。

以上の24首以外は、和詩の本文中に一箇所かそれ以上異文をもつ場合で、つまり四抄物を通して本文が二通りかそれ以上存在するという場合である。以下のようなケースが見られる。

a. 二通りの本文が存在しており、一抄物だけがその他と違う

例えば、表3-5.「江南春」和の一、二句目について、『幻雲抄』にだけ「間浅紅」と「鳥呼風」とあるのに対して、ほかの三抄物では共通して「映浅紅」と「鳥啼風」とあり、二通りの本文が存在する。この際、『幻雲抄』はその他と異なり、独自の本文をもつ。同じように、40.「隋宮」和の一、二句目について、『曉風集（四冊本）』にだけ「野花草石梁斜 潮芳落長堤鳥篆沙」とあるのに対して、ほかの三抄物では共通して「野花草石梁斜 潮落長堤鳥篆沙」とあり、二通りの本文が存在する。この際、『曉風集（四冊本）』はその他と異なり、独自の本文をもつ。あわせて7首あり、以下にまとめて示す。

『幻雲抄』：5. 25. 37. 『湖月抄』：19. 27.

『曉風集（四冊本）』：40. 『曉風集（六冊本）』：3.

b. 二通りの本文が存在しており、二抄物がその他の二抄物と違う

表3-7. と20. の二首あるが、例えば、表3-20.「秋思」和の三句目について、『幻雲抄』と『曉風集（六冊本）』では「孤鶴涙」とあるのに対して、その他の二抄物では「孤鶴唳」とあり、二通りの本文が存在する。7. についても同様である。

c. 三通りの本文が存在しており、二抄物がその他の二抄物のどちらとも違う場合

表3-31.「贈楊鍊師」和の一首だけだが、四句目について、『幻雲抄』と『曉風集（六冊本）』では同じく「何處尋幌」とあり、『湖月抄』では「何處尋春」とあり、『曉風集（四冊本）』では「何處尋聲」とあるように、三通りの本文が存在する。

d. その他の場合

以上のa、bとcの三ケースは、いずれも和詩の本文中に一箇所だけ異文をもつ場合であるが、表3中9. 14. 15. 28. については、いずれも二箇所または二箇所に以上異文が見られる。それぞれは事情が複雑で、例えば、9.「贈殷亮」和において、一句目については、上記bのケースで、『幻雲抄』と『曉風集（六冊本）』では「山穴」とあるのに対して、その他の二抄物では「山空」とある。二句目と三句目については、四抄物は共通している。四句目については、上記aのケースで、ほかの三抄物では共通して「近覺無人到上頭」とあるのに対して、『曉風集（四冊本）』にだけ「近覺無」とある。同様に、14.「香山館聽子規」和において、一句目と二句目については、四抄物は共通している。三句目においては、上記aのケースで、ほかの三抄物では共通して「西窓月」とあるのに対して、『幻雲抄』にだけが「西面月」とある。四句目についても、上記aのケースで、ほかの三抄物に共通して「魂夢飛」とあり、『湖月抄』にだけ「魄夢飛」とある。15. と28. についても、ほぼ同様の事情である。

このように、和詩40首あるうち、全く異文をもたないもの（24首）がある一方で、その他16首計24箇所にわたって異文が見られたこと、また、抄物間における異文関係が必ずしも一定していると限らず（例えば『幻雲抄』はほかの三抄物のいずれも異文関係をもつ場合がある）、様々であることがわかった。なお、たいていa、bとcの三ケースに見

るように一首に一箇所だけ異文が見られるが、dのように一首に二箇所かそれ以上異文が見られる場合もある。

6 まとめと課題

小稿では、主として嚴子安和を多く記録している『幻雲抄』(163首)・『暁風集(四冊本)』(160首)・『湖月抄』(154首)・『暁風集(六冊本)』(116首)の四抄物を調査資料にして、以下のようなことを述べた。①嚴子安和の置かれる位置は抄物によって様々だが、その抄物内部においては一定しており、また、ほとんど「嚴子安和云」や「嚴子安和」を冠して決まった記録様式をとっている。②「嚴子安和」は『唐三体詩』裴季昌注本系統を対象に作られ、明代(1417年)に成ったもの(七言絶句の和詩163首)で、後に「次韻絶句」や「次三体唐詩三体家法絶句」など数種の写本が伝わり、また、張・李の二人による「序(叙)」が付けられ、さらに「嚴子安和」のテキストとして無注原本と注本の両系統が流布していた可能性がある。③当時五山僧の間にあって、「嚴子安和」は間違いなく『唐三体詩』の解釈に用いられており、また、時には評価の対象にされたりしていた。④和詩のうち、全く異文が見られないものと異文が見られるものの両方があり、また、抄物間における異文関係が必ずしも一定しているとは限らない。

小稿は、「嚴子安和」の原貌を復元するための途中調査で、十分検討できなかった点が多く残っている。例えば、前掲(16)「早春遊望至歩虚詞 首尾四百三十餘首」とあるのは「嚴子安和」は四百三十餘首あることを意味するのであれば、七言絶句の和詩だけでなく、七言律詩と五言律詩に対して和詩を作ったはずだが、そういう可能性があり得るだろう。「嚴子安和」として数種の写本が伝わっていたと考えられるが、いつ誰によって書写されたのか。「嚴子安和詩注」と「俶通集注」とはどのようなものか。また、単純ミス^(注15)や書写者の誤写^(注16)によって異文が生じたと考えられる一方で、「間浅紅」と「映浅紅」のような異文を生じさせた原因は何だろうか。二通りや三通りの本文がある場合、どれが「嚴子安和」の原本の様子を示しているのか。以上は「嚴子安和」の原貌を復元するために解明しなければならない問題であり、今後の課題としていきたい。

日本に初めて漢籍がもたらされたのは、遅くとも5世紀以前(大庭・王1996〈8 ぺ〉)、または6世紀初頃の頃(神田1987〈9 ぺ〉)とされる。奈良時代に入って、漢籍が大規模に将来されるようになり、それ以降江戸時代にいたるまでの長い間、種々の漢籍が日本に伝わっていた。そのうち、なんらかの原因で散逸し、現在中国にも日本にも存しないものも少なくない。小稿で取り上げた「嚴子安和」がその一つである。幸いなことに、その本文は『幻雲抄』など数種もの三体詩抄物において記録されており、それが「嚴子安和」の原貌を復元するための貴重なデータとなっている。この点からして、抄物のうち、漢籍の原貌を復元する際に貴重な資料として利用可能なものがあり、これまで問題にしていなかった抄物をもつ新しい一面を端的に示していると言える。

注

- 漢数字は頁数、使用テキストに従う。アラビア数字は行数で、筆者による。このように記す場合は『幻雲抄』から引いている。以下同様。
- 本節において、特に記さない場合、坪井(1977)と谷澤(1977)による。なお、劉(2005a)・劉(2005b)・劉(2009)に述べた内容と一部重複している。
- 村上(1978)は、元刊本として日本に伝わったのはbとcの両系統で、cよりbはやや先であり、また、明刊本として日本に伝わったのはa系統であるとしている(28ページ～29ページ)。なお、日本に現存する諸本として、a系統は五種、b系統は二種、c系統は四種ある(30ページ～34ページ)。一方、陳(2010)は、中国国内において、bとcの両系統は元以降間もなく散逸してしまい、現存するのはa系統のみで、中に『欽定四庫全書總目』巻一―総集類存目一「唐三体詩説(元刊)」がa系統の原本に最も近いとしている(116ページ～120ページ)。
- 坪井(1977)では「重要なもの」として8種を、また、谷澤(1977)では「各図書館の蔵書目録、貴重書解題等」により14種を掲げており、重複を除けば、18種となる。
- ほかに、少々異なるが、抄物によって「子安和云」(『幻雲抄』『湖月抄』)・「子安云」(『湖月抄』)・「嚴子安和曰」(『曉風集(四冊本)』)・「嚴子安和之」・「嚴和云」・「嚴子安和此篇云」(以上『幻雲抄』)などがある。
- 前掲査(2012〈45ページ〉)は、後掲(19)に示す「嚴子安和」の李泰序の成立年が永樂十一年(1413)である記録に注目して、「嚴子安和」が李泰序の前に成立したはずで、「嚴子安和」成立年である「丁酉年」(後掲(16))が永樂十五年(1417)でなく、元の元貞三年(1297)であると指摘した。また、これを証拠に、『曉風集(六冊本)』に嚴子安を「大明朝」とした記録は抄者による誤記で、嚴子安は元の時に生きた人だと判断した。本節の⑥に述べるように、「永樂十一年」(1413)は、実は「永樂二十一年」の誤写だと判断できるので、小稿では、『曉風集(六冊本)』を含め、抄物に「大明朝有嚴子安」と記したのは間違いないと考える。
- 「張楷和三昧詩」については、『幻雲抄』に「張楷和」に冠する和詩を30余首、また、ほかの三抄物においても若干見られる。ただ、「張楷和三昧詩」は「嚴子安和」と違って、(11)(12)に「悉不和」とあるように、絶句のすべてに和詩を作ったのではない。なお、張楷は、次に掲げる『千頃堂書目』に載るところの明の人らしく、ほかにも「和唐詩正音二十卷」など和詩を作っているが、「和三昧詩」はここに記録されていないのが不思議でならない。
張楷 陝西紀行集 又輕候集(中略) 又和唐詩正音二十卷 又和許渾丁卯集 又和高季迪衍鳴集 又和中峰和尚梅花百咏(卷十八別集類)
- 『筑波大学・北京大学学術交流協定締結記念日中言語文化フォーラムひと・く・に・ことば―』(2014年3月23日於北京大学)における口頭発表の際、坪井美樹先生から、嚴子安のこの三体詩和は、独立した書物でなく、三体詩のテキストに書き込んだものという可能性がないわけではないというご教示をいただいた。これまで、和詩が書き込まれた三体詩のテキストなど見当たらず、(12)「兩本往々寫本」という記録を証拠に、現在では「嚴子安和」は独立した書物として考えたい。
- ここは「嚴子安和草案」において「己亥歲」が収められていない意。該当箇所について、『幻雲抄』では「嚴子安和句無」(三七二22)とあり、『湖月抄』(中)では「予按嚴子安和三昧詩 此己亥詩無和 不知遺亡乎 不唯宮詞欠和 此詩亦欠之 其必有意乎」とある。
- 査(2012〈45ページ〉)では、「永樂」を「咏和」としている。しかし、後掲(19)に「永樂」が二箇所あり、それと比較すれば、明らかに「咏和」は誤読だとわかる。
- 抄中に「叙」と「序」の両方の表記が見られるが、同じものを指しているのだろう。なお、張顥は『千頃堂書目』巻十八に「張顥 意叟集 字輯熙 奉新人 國子監丞」とある人物で、李泰は明・王世貞『弇山堂別集』巻十六に「洪武戸部尚書」とある人物らしく、二人とも明の人。査(2012〈46ページ〉)でも同様の指摘をしている。
- 嚴(1992〈47ページ〉)は、14世紀特に15世紀において明政府は当時日本からの入明僧に書籍を贈与することが外交上の恒例となったと指摘し、また、大庭・王(1992〈66ページ〉)は、『臥雲日件錄跋尤』に足利義政が遣明使に託して明に書籍を求めた記事があると指摘した。このように、この時期に僧侶によって漢籍がたくさん日本に将来していた。
- 「吳興」詩、林希(1035-1101年)作。『宋詩紀事』巻二十に「希字子中 号醒老 福州人」とあり、「吳

興」詩を記している。

- 14 表3について、ほかにいくつか説明事項がある。a. アラビア数字の後に、当該絶句の作者名（表3-1、杜常）、詩題（華清宮）、和詩の本文（川前駐馬解郵程 曉浴溫泉暖更清 十八樓臺無所處 白楊風起作秋聲）を示す。また、末尾の（ ）中に『幻雲抄』における所在を記入し、『幻雲抄』に二箇所以上わたって記録された場合、間に/を付してそれぞれ示す（九六15/九一23/九四18）。その他説明すべき事柄（「後の二箇所では一句目と二句目のみ」）があれば、同じく（ ）中に入れる。b. 『幻雲抄』において、同一作者の絶句が続く場合、初出以外に作者名が省略される作りのようであるが、それは特に書き添えない。c. 異体の文字については、使用する『幻雲抄』のテキストの形態を重んじ、できるかぎりそのまま写した。一部を示すと、例えば、冫（雪）、舩（船）、厂（雁）などである。ただ、そのまま再現できない場合、通行体に改めるが、一々断らない。例えば、食・魂・覚・會などである。d. その他の三抄物において、『幻雲抄』と用字上相違する場合、つまり広義で言う異体字と正字の間、または、異体字同士の間における字形の相違が見られる場合については、小稿では特に問題にしない。例えば、表3-3、四句目に「舩」（『幻雲抄』・『曉風集（六冊本）』）と「舩」（『湖月抄』・『曉風集（四冊本）』）、35、二句目に「才」（『幻雲抄』）と「材」（『幻雲抄』以外）などの類である。e. 挿入符・転倒符・返り点については、再現できなかった。
- 15 表3-9、と25、においてはいわゆる脱字の問題で、また、40、においては、一句目にあった「芳」字を間違えて二句目に入れたと見える場合である。これらは厳密に異文とは別問題かもしれない。
- 16 例えば、表3-15、と27、において「語」と「話」とを弁別できなかったり、19、に見るように本来「隻」であるべきところを「焦」と誤写したりする可能性がある。

参考文献（小稿で言及・引用したもののみ）

- 大庭 脩・王 勇（1996）『鎌倉・室町期の僧侶と中国典籍』『日中文化交流史叢書 9 典籍』大修館書店
- 神田 喜一郎（1987）『神田喜一郎全集 第八巻』同朋舎出版
- 蔵 紹鑑（1992）『以禅宗僧侶为主体的伝播形式（十三世紀——十六世紀）』『漢籍在日本の流布研究』江蘇古籍出版社
- 査 屏球（2012）『日本藏南宋遺民詩人嚴子安“和唐詩”輯考』『學術界』2012年9月号
- 谷澤 尚一（1977）『解説』中田祝夫編・抄物大系『国立国会図書館蔵三体詩素隠抄』勉誠社（1977.9）、巻末所収
- 陳 斐（2010）『「三体唐詩」版本考』『齊魯學刊』2010年第2期
- 坪井 美樹（1977）『解説』中田祝夫編・抄物大系『内閣文庫蔵天文五年写本 三体詩幻雲抄』勉誠社（1977.6）、巻末所収
- 村上 哲見（1978）『中国古典選29 三体詩（一）』朝日新聞社
- 劉 玲（2005a）『「三体詩幻雲抄」における漢籍の引用（2）——「単一の詩文」の類——』福井大学国語学会『国語国文学』44号（2005.3）
- 劉 玲（2005b）『「三体詩幻雲抄」における漢籍の引用（1）——「著作集」の類——』北京師範大学日文系編『日語教育と日本学研究論叢』第二輯（2005.8）
- 劉 玲（2009）『注釈中国古典文獻の日本漢籍抄物——以日本内閣文庫蔵天文五年写本『三体詩幻雲抄』為例』北京師範大学學報（社会科学版）2009年第4期
- 劉 玲（2013）『「三体詩幻雲抄」を通してみる室町時代における漢籍流布の状況』筑波大学日本語日本文学会『日本語と日本文学』55号
- 四庫類：四庫全書研究所編『欽定四庫全書総目』（整理本）中華書局1997年、胡玉緒撰・王欣夫輯『四庫全書総目提要補正』上海書店出版社1998年、續修四庫全書編纂委員會・復旦大学圖書館古籍部『續修四庫全書：總目錄索引』上海古籍出版社2003年、四庫禁燬書叢刊編纂委員會『四庫禁燬書叢刊：索引』北京出版社1998年、四庫禁燬書叢刊補編編纂委員會『四庫禁燬書叢刊補編：總目錄』（『四庫禁燬書叢刊補編』第90冊附録）北京出版社2005年、四庫全書存目叢書編纂委員會『四庫全書存目叢書：目錄索引』齊魯書社1997年、四庫全書存目叢書補編編纂委員會『四庫全書存目叢書補編：目錄索引』齊魯書社2001年、北京圖書館編『文淵閣四庫全書補遺』——據天津閣四庫全書補』北京圖書館出版社1997年、『四部叢刊 總目』（初編・二編・三編）上海書店1984～1985年、『四部備要總目』台湾中華書局民國

57～71年

- 『千頃堂書目』翟鳳起、潘景鄭整理、上海古籍出版社2001
『五山版の研究』川瀬一馬、The Antiquarian Booksellers Association of Japan1970
『日藏漢籍善本書彙』嚴紹璣、中華書局2007
『明詩綜』楊家駱主編「歷代詩文總集」、世界書局1989
『明詩紀事』蔡傳廉等点校、上海古籍出版社1993
『全明詩』（第一冊・第三冊）全明詩編纂委員會、上海古籍出版社1990～1994
『全明詩話』周維德集校、齊魯書社2005
『列朝詩集小傳』清・錢謙益編、上海古籍出版社1983
『明人傳記資料索引』臺灣中央圖書館編、中華書局1987
『弇山堂別集』明・王世貞撰、中華書局1985
『宋詩紀事』清・歷鶚編、上海古籍出版社1983

<付記> 小稿は2011年度中華人民共和國教育部人文社會科學研究一般項目（規劃基金項目11YJA751047）「日本五山僧的抄物『三体詩幻雲抄』中漢籍征引狀況与室町時代的漢籍流布研究」の研究成果の一部である。なお、小稿は「五山僧抄物『三体詩幻雲抄』及び『東福寺湖月和尚三体詩抄』に拠る嚴子安『和唐三体詩』考」というタイトルで『筑波大学・北京大學學術交流協定締結紀念日中言語文化フォーラムーひと・くに・ことば一』（2014年3月23日於北京大學）における口頭発表の内容の一部をもとに、大幅に加筆・修正を施したものである。口頭発表の際に貴重な御教示を賜りました方々に、心より感謝申し上げる。

（リュウ レイ 北京師範大學外國語言文學學院日本文系 副教授）